

綠蔭書房

中島利郎／河原功／下村作次郎編

日本統治期台灣文学文芸評論集

第五卷「一九四三年・四月～一九四五年・三月」

中島利郎／河原功／下村作次郎編

日本統治期台灣文学文芸評論集

第五卷「一九四三年・四月～一九四五年・三月」

綠蔭書房

凡例

- 一、第五巻は一九四三年四月、一九四五年二月迄の雑誌に掲載の作品と「日本統治期台湾文学文芸評論目録」[執筆名索引]「解説」を収録した。
- 一、本評論集は、日本統治期における文芸関係の文芸評論を集成したものである。ただし、この間に「文芸評論」というジャンルは確立されていわけではないので、文芸評論はか様な文芸関係資料を含んでいることをお断りしておきたい。また、収録の主旨は台湾文学関連資料であるが、編者たちの目に入った若干の映画や演劇に関する資料をも収録した。
- 一、新聞類及び単行本収録の解説等は紙幅の関係から今回は省いた。
- 一、作品のオリジナルリティをできる限り生かすために影印版にした。ただし体裁の統一をはかるために、原本のノンブル、枝、読み界の一部は削除し、新たに復刻版のノンブル、枝をいれた。
- 一、復刻版の判型はA5判に統一した。そのため判型にあわせて、一部の作品については、原本を適宜、縮小・拡大使用した。
- 一、作品の配列は年代順とした。
- 一、不鮮明な箇所は適宜修正し、不明な箇所は不明又は欠字とした。
- 一、各著作の出版は各文末に付した。
- 一、原本中の広告作品と関係ないものは削除した。

目次

一九四三年「四月」(二月)

四月

台湾作家の脆弱性について 宝泉坊隆一 9

頼和氏追憶 楊雲萍 11

非文学的な感想 濱田雄雄 13

投書雑誌の必要 矢野峰人 19

随想、日本精神 その他 渋谷精一 23

演出雑感 小林洋 29

懶雲先生の思ひ出 朱石峰 32

小説と懶雲 守愚 35

頼和先生を憶ふ 楊雲 38

五月

文芸時評 西川満 44

台湾文学雑感 紙文瑛 45

私は斯う思ふ——台湾文学のために 田中保男 48

よしなき事さ 濱田雄雄 54

六月

文芸時評 西川満 58

文芸時評・文芸台湾四月号を中心に 宝泉坊隆一 63

文芸 垣の外 65

「牛のゐる村」に就て——台湾の文学のために 辻義男 66

七月

同金波論——連の作品を中心に 辻義男 70

文芸時評・台湾文学夏季号を中心に 宝泉坊隆一 76

文芸時評 濱田雄雄 78

小説「道」について 濱田雄雄・西川満 80

台湾映画協会の「達成四十八年」 杉山一 81

春秋映画社の「皇民高砂族」 82

台湾出版界雑感——特に赤本に就て 楊雲 83

台湾文学史序説 黄得時 86

一度は概念的にも 大野幾郎 96

詩集「高麗村」を読んで 飯野菊治 99

異リリズムの擁護 伊東亮 101

八月

小説批評——昭和十八年上半期の台湾文学 高見順 106

濱田集雄論——一連の短篇小説を中心に 辻義男 113

九月 楊と鉄と面の皮——黄得時氏「台湾文学史序説」を読む 楊雲萍 121

文化時評・小説「道」について 徐坤泉と黄得時 高芳部 126

文学者の矜持 竹村猛 128

私の文学する心 張文環 136

一〇月 文芸時評・作家と読者 龍瑛宗 141

今月の人・中山らと女史 洪山春江 143

文化時評・賞 小国民文学 144

十一月 今月の人・濱田集雄氏 万里光悦 145

台湾文学について——「陳夫人」以上の作品を待望す 林恭平 146

大東亜文学者大会に出席して 楊雲萍 148

十二月 台湾決戦文学会議雑感 新田淳 150

敵兵制をめぐって 長崎浩・岡金波・陳火泉・神川清 151

今月の人・努力家龍瑛宗氏 黄得時 159

回顧と内省 龍瑛宗 160

台湾決戦文学会議手帖 郭啓賢 162

巻頭言 163

台湾決戦文学会議の記 165

台湾文学史(二)(三) 黄得時 167

演劇対談——厚生劇団公演題目評 蔵田貞治 199

時について(断想) 上杉安 205

台湾演劇の一つの記録 張文環 211

一九四四年 一月 台湾決戦文学会議 217

「われらの主張」 必勝の信念 長崎浩 224

日本文学の伝承 新垣宏一 225

皇民文学の樹立 神川清 226

戦後の進歩 今田嘉新 227

皇民感情の純化 河野慶彦 229

文芸誌の戦間配置(要目) 西川清 230

台湾文芸 朝田長太 266

呂赫若論——「作品集」「清秋」について 河野慶彦 267

台湾文学界の総躍起 峰人 271

台湾文学者総躍起 今田嘉新 272

八月 作家派遣について 282

派遣作家の感想 吉村敏・西川清・高山凡石・濱田集雄・龍瑛宗・楊雲萍・楊達・河野慶彦・張文環・長崎浩・岡金波・新垣宏一 283

文学報国の赤心 294

東洋の真珠 斎藤勇 295

詩のこと二三 長崎浩 299

一九四五年(三月) ある作家へ 竹村猛 303

文芸時評・自己の喪失 浦崎良 309

解説 中島利郎／河原坊／下村作太郎 313

執筆者名索引 日本統治期台湾文学 文芸評論目録 9 1

台湾文学半年(一)——昭和十八年下半期小説総評 窪川鶴太郎 249

三月 増家と文学 蔵田貞治 257

五月 新しい文芸雑誌 竹村猛 262

六月

一九四三年[四月—二月]

に一時此種解雇して、いろいろ

時が見たいとききりに言った。

(左の隣隣深きには、友人のところが

に解雇するといふ事は今まで

殆んどなかった。その氏がこん

な事を言ひ出すのは、今にして

思へば一つの前兆とも考へられ

るのである。友よ、暫く様子の感

害は、もう永遠に君に回復して

もらふ事が出来なくなつた。)

○

更に話がつづいて、書部の話

となり、北平筆壇の話が出た。

それから通徳堂の話が出た。暫

らくしてから、突如、氏は我

々のなした新文藝運動は、すべ

て無敵になつた、と叫んだ。

僕は吃驚して、氏を見守つた

氏は今まで臥て居た傍の上半身

を起し、左手で苦しむ心算をお

さへた。いや、三十年後五十年

後には、きつと我々を呼び出す

時が来るよ、と僕はまづきな

がら慰めた。僕は涙の出るのを

こらへながら、持つて来たうち

の筆桿は首いじで、一つ細肩で

すとすめた。ああ、ありがた

うと恋へながら、また様になり、

もとの温厚な妻になつた。

○

そして氏はそれから数日もな

くして此の世を去つたのだ。卒

年、古暦に数へれば四十九、新

暦に数へれば五十である。

○

僕は書壇盛衰の新聞を見て居

ないで、氏の逝去を知つた。

は、大分後の事であつた。(我主

から各個人に計畫を出さなかつ

たしたがつてその葬式に参列

する事が出来なかつた。式に参

列した一知人の話によると、會

葬者五百餘人に上り、また賓客

としての氏は、彰化媽祖と稱さ

れて居た様に、彰化きつての流

行僧であつた。毎日平均百名以

上の奥者があつた。それに拘

り死後、尚一萬餘圓の負債を

残して居る。あの質素な生活を

したといふのに、一枚の處方箋

平均して四十餘に足りなかつた

さうである。醫者にいらい／＼

あるわけである。一月有餘立つ

た今日の夜、此の一小文で、

我が友を弔はんとする。氏の生

前の盛衰をまづ語らうべきだつた

かも知れない。然し今それを語

らないのは、後日、更に詳しく

語りたいからだ。友よ、ただた

だ安らかに眠れ。(癸未、三月

二十日夜半、暫靜樓上にて。)

(民権廿四) 22 30 上五三

非文学的な感想

濱田隼雄

昨秋の大東亞文藝者大會の生々しい印象が何いかに文藝す
べきかの反省をし模倣させてゐる境中に、臺灣文化賞の有難

い沙汰を受け、私は内心惶然たる口をいまだに過してゐる。
言葉では簡単である。私は文壇公の誼を盡せば良いのであ
る。星展の遺を私の作品に於て具現すれば良いのである。
が、私は今尙迷ひつゝ、自信を持ち得ないで、惶然として
ゐるのである。

決戦下の文學、特に臺灣文學は如何なる方向に進むべきか
についてはいろ／＼な事が云はれてゐる。けれども私は猶
得がゆかない。戦ひの文學と唱へる人の作品にも、日本文學
の傳統と生ける人の作品にも、私はそれらしいものを十分
に發見し得ないのだ。私は自分の未熟がそれを發見し得ない
と思ひ、かへりみることをくり返すのであるが、結局すると
ころ、叫びの言葉の新しいにも拘らず、そこにあるものは、
文化至上主義的な、従つて藝術至上主義的な外國派の、そし
てその阿流にすぎない浪漫主義や、暴露諷刺の淵から脱却し
切れない自然主義の未洗に過ぎぬものが多すぎるのである。
そこには私の文學を盛り動かすものがあるとは思へぬ。

私は結局私なりに自己の途を拓くしかない。それは當然で
あるかも知れぬ。が、本島の文學が非常な進歩期に、形の上
では入つてゐる現在、私のみならず他の人々も實は一種の流
迷に多かれ少かれ誘はれてゐるのではないかと、と焦燥しな

でもない。

私は評論とか批評とか、とにかく論ずる事を今まで極力しないであつた。私は小説で物を云へば足りると思つてゐたからである。が今は、自分の混沌のありのまゝを、私自身の途を拓く爲めに書き出さうと思ふ。従つてこゝに私の感想の對象となるものは、私自身の作品を最初に含めた臺灣の文學である。私は他人の作品のみをあれこれと云ふべきではない。

私たちは、文學文學と文學のみをお題目にして、文學以前のことばかり考へてはなかつたのではない。

私はこないだ荻窪と蕪村について二三の本を讀み、心から頭を下げた。二人は併々以前のものを弟子に読めてゐる。風操と云ひ離俗と云ひ、その言葉は違つてゐるけれども、畫法に云ふ生動すき氣韻を第一とした考へ方である。生動すき氣韻なくして句を考ふるべしとす、風操のこゝろ、離俗のこゝろを讀みかすして句なしと云ふのである。

私たちは風操とか離俗と云ふ言葉が古い故に之についてよく考へて見ずしてきてゐるが、傳統に生きているとはかうした事について眞面目に思ひを練ることであらう。

言葉が口付けられ新しくしよう。それは文學以前の教養であ

年に於て、戰爭を思はざる内心を以て文章を動かし、貯蓄をせざる身を以て文學を振興を云ふ事は、何と云つても文藝者の態度ではなう。

この事が臺灣文學の教養の出発點であると私は思ふ。これを思へば教養を如何に高め深めるかは自明出来る。それは學校に學ぶことではない。文學に關する知識のみを蒐集する事でもない。

芭蕉は風操とは何かの間に、「竹のことは竹に問へ」と答へ、蕪村は離俗の法に、「對を語るべし」と云ひ又、「多讀書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣」と云つてゐる。二人の方法は実事に異なる。私たちの方法も必ずしも一つではない。私自身の方法も定かではない。

が、ともかく、文學以前の教養をもつと深めなければならぬの自覺が、私たちのこれからの文學を拓くと云ふ事、かくすることによつてのみ、私たちの文學が外道に陥みこまぬであらう事は確信出来るのである。私たちの文學に於ける歴史觀、世界觀の缺陷はこれによつてのみ排除されると思ふのである。

私は今「外道」と云つた。私たちの文學が踏み込み易かつた「外道」とは何であつたらうか。

る。

私たちの臺灣文學は今まで教養を無視して來たのではなくらうか。云はゞ文學的にのみ物を見、考へ、更に云へば文學の技法を磨くことを以てのみ文學的教養を考へて來たのであるといふ。

私はいつか本島の作家に教養を云つた事がある。その作家がたゞちにやはり大學を出てゐないと駄目です」と卑屈な表情を弄べた時、私は達ふと云つたものゝ、それ以上は云へなかつたのと思ひ出す。

教養が、少くとも文學の教養が、學校の高低によつて理解されるところに、私は私たちの文學の教養の低さを見る事が出来る。

私は極言すればこの點に臺灣文學の最大の缺陷があるのだと思ふ。私は此處で教養のお談義をするつもりはない。たゞ文學以前の事にもつと努めなければならぬと、自分の問題として思ふのである。

文學者は文學者であつて世間人ではない、と云ふ間違つた自負を棄てよう。世間人と云ふものが、蕪村の所謂市俗、氣ならば、もとより世間人でない方が正しい。けれども、この

第一に安便な文學至上主義を思ひ出すのである。私たちはよくひもしたし云はれもした。「ふん、材料はいゝが文學的にはぬ」「面白いが文學としてはかな」

もう一つ文學は文學的であらねばならぬ、けれども、考へさせられるのは、文學的に云つてしまつて安易に事を済ましてしまふ態度である。この場合私たちは文學的と云ふ言葉を何となしに技法的な意味で使つてゐる事が多かつたし、文學が興へる感動の相が明白に變つてゐるに氣づかぬ事が多かつたと思ふ。私はこゝで再び芭蕉の不易流行を云ひ立てようとは思はぬが、不易なものゝみにかゝらずつて、眼界を極端に文學的に狭めてゐた儘では自覺をぬけるまい。

私たちの文學的だと思ふ文學は何であつたか、を見究めれば事實は歴然たるものである。一つは十分に培養しきれなうである自然主義の末端である。

末端と云ふ字を使ふのは、敢ての事である。私は自分の「模丁之筆」を考へるのである。それの持つ謙さと思ふのである。自然主義が私たちの文學の一つの過程として當然あることは云ふまでもない。がそれは過程としてである。過程を永遠のものゝやうに後生大事にしがみつてゐる時、私はそれを末端と評より他はない。

末端は先づ、私たちの文學が現實の否定的部分に、たゞ、現れてゐる形に現れてゐる。私たちの文學の素材は云ふまでもなくこの島に生きてゐる人々である。内地人本島人を問はず、意識するとせねばと拘らず、この意識下に生きてゐる人々である。その人々の行為には、たとへば心理的なものも、現在の島の全體的進行に對して肯定的、積極的なものと否定的なものも併存する。否定的とは表立つて反對の立場にあるもののみではない。全體的進行への無理解・無關心、或は迷滞の如き弱々しきものすべてを含むのである。

私たちの文學の中で、特に本島人を描いたもの大部分は、かゝる意味での、否定的現實の、なまなま露生に過ぎないことを改めて見直さう。本島人の作家がいつまでも本島人の農民としての非積極的、非肯定的な面をいつまでも暴露的な現象でないだらうか。殊に本島人讀者の胸の中にかさねしたものの憤慨の聲が聞えるとなれば、それを卑劣なものとして昂然としてゐる態度は美へるべきであらう。

こゝで又當然所謂小説の事が思ひ出される。私小説が日本文學の本質だと云ふ安易な理解、従つてその過程としての限界に對する無智である。いつまでも、まるつきり私的なものに閉ぢこもつてゐる限り、それが如何に心理的に所謂外國

文學流の深刻さがあらうとも、末端の域を出ないと思ふのである。

第二のものは、第一のものと一見對照的でありながら、現實は統一重の積極的な浪漫主義である。一體私たちの文學を現實主義とか浪漫主義とか區別づける事とは今のことゝ危険でもある。いくらかゝるがましいかも知れないが、一體はさう云つても良からう。

浪東が如く、嚴密な計算打たずにはゐられない浪漫主義である。私はかう云ふ以上浪漫主義の正しさを考へてゐるのである。簡単に浪漫主義を否定し去るのでは斷じてない。

私はそれを、現實の延長の上に據てる理想が生み出すものと單断に規定するより好まない。

私は今更、理想と幻想と理想とを云ひ立てるつもりはない。かゞ考へ度いのは理想である。現實の可能な延長を認識し直観する事によつて與えられる、そして可能なるが故に永遠であるべき理想である。

かゝる理想なき浪漫主義は、現在の私たちの文學から靜謐的なものとして排除すべきであらう。

その極端な例は、この年の現實をすつかり離れて遊んでゐるまででなかつたらうか。現實を云ふ者は亦、否定的な現實の力に壓倒されたまゝ、事々現實は刻々とその肯定的な部分を擴大しつゝあることに氣づかず、従つていつまでも光りを求めず、同じ闇の中に孤獨してゐたのではなからうか。

私が大東亞文學者大會から最初に感動を受けたのは、この大會が大東亞戰爭の戦果の一つとして産まれたものだ、といふ事である。

この戦争が東亞にひろげつゝある一つの理想、その理想の下にのみ大東亞の文學が語られ得たのであつた。そして私は今にして自分の「南方移民村」を思ふのである。

私は、舊丁之圖を自然主義的暴露小説の域を脱しないものと思ひ、そこからの私の更なる企てた。その結果が南方移民村であつた。私はこゝで、傳統的な日本農民の堅忍不拔の美しさを追ひ、苦難から彼らの氣々と産み出した光りを描かうとした。私は一つの理想を定立しようとした。そして結果は理想が先走つてしまつたのである。

「志無き結果は、追求する美にしも達しない、永遠に近づかぬ」と云へば、虚無的な美の追求であり、難々しい厚化粧の前の首化粧のやうなもののすゝものであり、リリシズムと稱へては、知識階級の寶と誇稱された異質なない歌謡が今尚餘韻をひいてゐるのではなからうか。逞しいもの雄大なもの、永遠に近づかぬもの、追いつかずリリシズムといふものを、私たちは否定する事が先で、探求しようとするものであらうか。

思へば私たちの文學には、何と云つても正志が埋められ、缺いてゐた。難々しく浪漫と云つてさへ、その明るさは両方の烈しい太陽に明るく見まがふたもの過ぎず、費は眼くらめ、白雲の間に我々あらすときどき、浮かれ遊んでゐる明

理想の先走りの因となつたのは何であつたか、私がやうやく迫り得た結論は私の理想が未熟なものであつたといふ事である。私は鹿野村の現實を正面して、それが持つ否定的な相にとははれ過ぎ、知らず知らず、私が排さうとした心に動か

されてゐたに違ひない。その事は又、大東亞戦争に對する私の理解が生きてゐなかつた故であつたと思ふのである。私の今の氣持で書けば、南方移民村は別な形で現れてゐる筈である。

私は自作などを引合ひに出した。自分の反省を他に押しつけてよいのではない。私たちの文學が大東亞戦争の意義に徹すれば、徹しようと思へば、私たちの限いてゐた理想が作られる筈だ、と云ひ渡すのである。

前に云つた教養といふものも、卑屈な民族意識や無反省な優越意識をさらりと棄て去つて、今の大東亞の理想を我がものとする方法であつた。

もちろん、その理想は私たちの文學に於ては、文學として現れた理想であることを私は否定しない。が、理想の文學化と云ふことによつて、何か出来上つた文學の型の中に理想をはめ込む事を第一とする態度は否定し得ないのである。そこではやはり文學が第一として理想を追ひ退けてゐる。私は文學を云ふよりも、皇民としての理想を最初に持ち度い。それなしに私たちの文學は舊態依然たるものではないか。

理想の文學化を考へるよりも、理想そのものの中から私たちの文學が出てくる、遂に云へば自づと文學の出でくるまで

理想を追ふべきである、と思ふ。
かうした方向に於てのみ私たちは日本の古典の中から傳統を身につけ得るし、この處に於ける日本文學、外國文學の單なる模倣ではない日本文學を私たちのものに出来ると思ふのである。

『台灣雑誌』 280 74 - 79 頁

投書雑誌の必要

矢野峰人

他所目には如何に思ふが、少くとも私の眼には、最近に至つて本島文藝界の水準が頗る高まつて來たやうに見える。昭和三年以前の情況は詳にしないけれども、私がこちらに來てからでも、随分色々の文藝雑誌が出たり讀れたりした。中には、學生の手になれるものではあつたが極めて高踏的な、詩歌中心のものもあれば、また極めて手廻りの粗い、プロ派的色彩の濃厚なものもあつた。然し

それらは何れも文壇青年の自覺的獨語の範圍を出でず、如

何に最良目に見ても貧弱低級の調を免れ得る底のものであつた。従つて、あつた雑誌が如何に多く刊行されたとしても、それを以て過去に於ける本島の文藝が盛であつたなどとは到底言ひ得ないものである。

これら幾多の雜誌に載つた作品に比すれば、少くとも昨年來本島の代表的文藝雑誌に發表されたものは、如何に優秀である事か。早い話が、臺灣在住作家の作品集が二種も殆ど同時に東京に於て刊行され、而も極めて短期間に版を

重なるに至つた事は、本島では正に空前の事であらう。而してその周旋には、尙幾分未完成とは言へ、かなり優秀なる素質を有する新鋭が少くとも數名はたえず切實琢磨しつゝあり、多望なる將來を約束して居るのである。私は、これらの事實に直面して、本島に於ける文藝興隆の氣運の今や眞に到来せる事を信ぜざるを得ないのである。

斯うした氣運は、如何程人爲的に醸成しようとか試みたとて、決して簡潔急速に作られるものではなく、やはり時機の自然なる到来を待たねばならない。而も、その到来たるや、然る度々あるものでもなく、また一度来れば、容易には再び過つて来ないものである。されば、苟も臺灣の文藝に關心を有し、その隆昌を冀ふの士は、この氣運をば飽足も確保活し、能ふ限り實を結ばなくてはならない。これこそは彼等に課せられたる使命なのである。

而して、斯かる氣運を全局的に普及水陸せしめ、以て將來の成果を明せんがために必要な事は、内地人たると本島人たるとを問はず、本島在住の青少年のために、國語によ

る自己表現の機關を興へる事ではあるまいか。特に本島人青少年にとつては、正しい國語を自由に驅使し、これによつて自分の思想なり感情なりを十分に表現する事を練習する難點が必要なのであるまいか。

本島で現在發行されて居る數種の短歌雜誌や『臺灣教育』などは、本島人男女の作品が毎號載つて居るけれども、前者の利用は當然個人とか社友とかに限られて居るであらうし、後者はまた會員即ち本島教育界以外の人の作品は受けない筈である。従つて、これら社友や會員以外の、一層廣泛な社會に在る人々の作品發表の機關は先づ皆無きやつて寂しい筈であらう。況や、上記の雜誌に掲載されるものは、單に短歌その他の韻文に限られて居るのであるから、散文作品に至つては、寫生文々と評論文々とを問はず、何處にも發表する事が出来ないのが現状である。斯くて、彼等は、その習得たる思想や感情を文筆に表す機會を得ず、さしてや想を練り辭を磨く事など思ひもらないのである。

このやうな有機では、たとひ國民學校に於て、或は、更に上級に進む者は中等學校に於て轉折、いはゆる「作文」を課せられにしても、未だ國語によつて自己を表現する術を十分獲得せざるうちに弊害を去るから、或程度の讀書力を習得しながら、國語をば完全に自分のものと爲し得ないで終る事になる。何となれば、自分の表現しようとする思想や感情に適切な言葉と言ひまはし方とを興へ、如何にも自分の言葉で語るといふやうな氣持を懷くやうにならな

い限り、未だ國語を習得したとは言ひ得ないからである。されば、國語をして、眞に本島人の言葉たらしむるためにも、國語による自己表現を試みさせる機會と機關とを、益々興へなくてはならない。その意味に於て、私は、本島人青少年を主たる對象とする投資雜誌の出現を要望するものである。

最近のやうに、用紙の紙制が嚴重に行はれるやうになつては、ひと頃のやうに自由に個人雜誌を發行する事も困難であらうが、これの盛なる發行は往時の投資雜誌をして久

しくその跡を踏たしめたかの觀がある。従つて、現代の青年には、昔の投資雜誌の如何なるものであつたかを想見する事さへ困難であらう。然し、明治三十年前後から大正十一年前後を、東部には斯うしたものがいくつかわり、全島の文學界とか青少年に對し、策進場を提供すると共に、また或程度の文壇への登壇門ともなつて居たのである。

勿論、投資雜誌と言つても、懸賞募集を行ふものと然らざるものとがあり、前者は黄金目富の投稿者を吸致さるといふので、時に一部の人士からは一種輕蔑的な眼を以て眺められる事もあつた。『文章世界』とか『秀才文壇』とかはその尤なるもので、『文庫』とか『新聲』とかは後者の代表的なものである。米川正夫、中村白雲、三上於菟吉、倉田百三、内田百閒、片岡鐵興、木村毅、邦枝完二といふやうな作家は『文章世界』で筆を練つた人々であり、横濱夜雨、小林森南、北原白秋、三木露風、川路柳虹、島木赤彦、窪田空樹といふやうな詩歌人は、何れも『文庫』や『新聲』から果立ちしたのである。

懸賞雑誌の弊害は、純真なる青少年の射倖心を刺激したり、虚榮心を煽つたりする事にありと言はれて居る。然し、入選入賞はもとより實力によるものであるから、これを一概に射倖心といふやうな、拙鈍に類した場合にのみ用ゐられるやうな言葉を以て謂ふべきではない。また、「虚榮心を煽る」と言ふけれども、當選は本人を喜ばせこそすれ、當選者自から進んでこれを他人に誇示して得意になるものでもない。若し夫れ、自分の作品を人前に示す事が不可だといふのであるならば、國民學校児童が習字圖書や手工品等を展覧會に出陳するも彼等の純真なる意心を傷つくるものと云はねばならぬ事になつて来る。

また、一步を譲つて、多少の弊害を伴ふとしても、自分の作品がその道の先達や権威によつて公に批評され評價されるのを見る事は、他では到底求められない指導と獎勵とを與へられる事になるといふ事實を看過してはならない。勿論、たゞ賞を得んがために模倣したり、甚しきに至つては剽竊するが如きは唾棄すべきであるが、斯かる弊は、そ

のやうな事を行ふによつて、自分を公衆の前で辱しめ、かつその智の上に身を置くものである。されば、懸賞さへ宜しきを得たならば、懸賞雑誌必らずしも不可とは言ひ難いし、また必ずしも賞を懸けねば美談にならないとも言へない。要は指導の如何にあるのである。

斯ういふ度、自己表現の方法を會得するために、また自己の價値を公に問ひ、自分の内なる隠れたる才能を興發し發達させるためにも、投資雑誌の有つ意義は相當重大である。私は、むかしの投資雑誌が、明治大正の文壇や詩歌壇を形成する多くの異才の養成場であつた事を知ることが、本島文壇の將來をば左右するやうな英才をかくむ投資雑誌の必要を説き、その速なる出現を望むものである。

〔日本文藝〕 32 104・107頁

随 想

日本精神・その他

道 谷 精 一

日本精神に就てこゝ二、三年來『日本精神』と云ふ言葉をよく見受ける。『日本精神作興週刊』など、云ふものも出て行はれたやうに記憶する。日本精神總動員などといふ言葉もあつたやうだ。今更らしく日本精神に就ての名義が陸續と現はれる。流行と云へばそれまでだが、それにはやはり流行だけの必然性はなくてはかなうまい。事實であつたのである。しかもその必然性は大東亞戦争の開始によつて、確固不拔の基礎を確立したのである。日本の國の有様さは、洋行しなければ判らないと云はれる。同じ烈風で、日本人なら強でも生得的に持つてゐる筈の日本精神も、それだけにまた、時にはその美しさを忘れたり、多眠をむさ

ぼつたりもするのである。支那事變當初までの無制動的西洋文化の滲々たる侵入は、日本精神の多眠の上に行はれたと云へぬであらうか？ しかし今更になつて、明治以來の西洋文化の侵入を感しざまに云ふ、一部の人類の意見には、もとより賛し兼ねる。それでは日本精神をはき違へることになる。日本精神とはしかく狭隘なものではない。

日本精神が何であるかと云ふことになる、快刀亂麻的な明解答はあまりないやうだ。もつとも民族固有の精神など云ふものは、さうたやすく定義づけられるものでもなく、またさう云つた定義など云ふものは、却て誤解を招き易いものであるから、日本精神を知らない他民族に判ら

せるには、やはり日本歴史を正しく把握させることによつて、その中から體得せしめるのが一番確かな方法のやうに思はれる。

しかしさうばかりも云つておられない。修身の本などには國民性の特色として、清明ななど云ふことを教へてゐる。明瞭にして樂天的、正直にして勇敢、名譽・廉潔を尊ぶ精神である、なども説明されてゐるが、やはり定論と云ふものは難しいもので、あまりびんとは來ないやうである。

三國條約締結に關する大詔に

「萬邦ヲシテ各々ソノ所得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵々安ンゼシムル」と云ふ御言葉がある。理窟と云はれると因るが、私は日本精神の本質はこの御言葉、就中、「萬邦ヲシテ各々ソノ所得シムル」の精神ではないかと考へる。各々その所得してその堵に安んじることが日本精神の真髓ではあるまいか？ 一切の私事を忘却して盡忠として大君の邊にこそ致る、皇室勇士の英雄的行爲は、誠に日本精神の模範と申すべきものであるが、かゝる義烈的行爲も、云はく、その堵に安んじてゐるものでなければ所詮はかなわない。

は島國根性である。女學校にまで英語を強制的に與つた從來の外國語偏重の風潮が、今回の處置により、正しき姿に還されたことは、これまで日本精神の顯現と云ふべきであらう。

日本傳來の禮儀の道徳も、所を得て堵に安んじる精神の失はれぬ限り、すたれる事はないであらう。禮儀の類は、人格者等の誤れる解釋に基く。或る程、抽象的人格は平等であらう。しかし、現實の人格はる抽象的人格ではない、【所】「關聯した不可分の人格である。親子の體儀は、抽象的人格平等から生れるのではなく、その各々の得てゐる所の相違によるものであり、日本精神は必然的に禮儀の道徳を堅持するものなのである。

「東方の門」と「細雪」

島崎藤村と谷崎潤一郎の兩氏の創作がのつてゐると云ふので、中央公論新年號は發賣と同時に、四・五時間で賣り切れたと云ふ。私は先日人から借りてやつと讀んだのだが、ともかくも大變な人氣である。このところ若手の作家顔色なしである。

ことではなからうか？ 描寫になることを名譽なりと稱する米英の思想の如きは、所を得てその堵に安んじてあらぬが故に、危機に處しては、個人の生命の前には、國家を賣つて恬として恥じぬ賣國奴の、動物的生命、本能に對する諒解の解にすぎない。捕虜が眞實名譽であるならば、銃をとつて戦ふ必要はない筈である。

中學校に於ける外國語に關する文部省今回の處置は極めて妥當である。六東亞戰爭の開始に伴ひ、一部人士の英語全廢論に左右されなかつたのは、當然の事ながらさうにたえなない。今回の改正により、外國語は正しく外國語としてその所得したものである。英語と國語が並々と言をならべてゐた如き、或は英語の方が國語より重要科目の如くに取扱はれてゐた從來の教育方針は、英語全廢論と同じく、日本精神の多民族の止になされた遺傳事であつた。學科目としての英語はあくまで外國語として把握するべきものであり、帝國の言葉として單純に把握されるならば、英語全廢論にならざるを得ない。問題は今日、外國語として英語を遠ざけることの可否にあり、代りのものを與へる單なる全廢論

私は音楽に大變暗いのであるが、オーケストラと云はれる交響樂と、ヴィオリンの獨奏曲とはどつちが一體音樂として高級なのだらうかと考へた。その結果私は、私なりにこのやうに考へた。交響樂と獨奏曲とは、云はゞ聲の違ふものだから、(もとより音樂としては同一)なのだが比較するのが無理で、意味のないことだ。と。處が、實の處、私の感情は、交響樂は同半この大音樂で、獨奏曲は、何かかう大音樂から遠い、日本座敷のこままりした四半のやうな音樂なのである。そして結構、獨奏曲の方が樂しい場合が多く、交響樂はつまらぬ場合が多いのである。

「細雪」を私は誠に一氣呵勢に讀み上げたものである。大變面白かつたのである。流石にうまいものだと思つたのである。ある批評家は、時局的でないといつて不満がつてゐたが、私はむしろ逆に、かくの如き日常的事件の中に時局を如何に反映させないで興味を持つたのである。問題は有閑階級が時局的でないのではなく、時局が有閑階級に如何に反映するかになつてはなるまい。そしてそれは完結しなければ云へぬ事なのである。

「東方の門」を私は「細雪」に續いて讀んだのだが、肉體

的疲勞の條件もあつたのであらうが、私はやつと讀み上げたのである。率直に云つて面白くなかつたのである。或る程、羅蘭の始めから明治に至る三十年の歴史を、かくも簡潔な筆致で、しかも單なる記録としてではなく作者の體臭を匂はせながら綴ると云ふ事は、決して容易の業ではないのである。しかし面白くなかつたのである。就中、平田篤胤や、シーボルトの件は、複習をしてゐるやうで甚だ退屈である。

處があるのである。讀み終つて後の感じでは、面白くなかつた「東方の門」の方が、愈々大文學が始まるんだと云つた感じがして、「細雪」の方は決して大文學が始まるぞと云つた感じではないのである。しかし「細雪」の方が面白く楽しかつたのである。そこで私は交響樂と獨奏曲を思ひ出したのである。交響樂は、その形式に於て、素人をコケオドカス、をつかんでゐるやうである。

批評家の時評をみると、「東方の門」が壓倒的である。「東方の門」を全然買はない人もあるにはゐたが、丹羽文雄氏は座談會で、「細雪」を評して、久し振りに心に満たされるものがあつたと云ふやうなことを云つてゐたやうに思

はなく、緩慢ではなかつたにしろ、早すぎるとはどうも云ひ難い。

文化はもと／＼、人爲的な事項なのだから、その速度も任意に手加減できる筈に違ひない。しかしこの場合、任意は個人のそれではなく、全體のそれであらなくてはならぬ。新しい文化創造は、個人の力があつて力あり、その限り、に於て、天才の出現は、文化創造の原動力をなすとしても、全體としての文化水準の引き上げは、よく一個人のなし得る處ではない。

もとより一個人の努力も、制度の完備も全然無力だと云ふのではない。奉公會が臺灣文化の向上に果してゐる役割は輕視すべきものではない。たゞさう云つたものは、單獨では進化論的速度しか發揮出来ぬと云ふ文である。文化の速度を加速度的速さにするには、さう云つた、個人の努力や制度の完備の外に或るものがプラスされねばならぬ。それは云はゞ文化意欲とでも云ふべきものであらうか？

國民各自が、或は大衆各自がめい／＼この文化意欲を強く自覺した時にのみ、文化水準は驚くべき速度を以て向上する。明治維新後の驚異的速度も、また例外ではない。

ふが、時評家は、概ね「細雪」をあまり買はぬか、歎殺したやうである。それ等の批評家は必ずや「東方の門」を速讀どころか面白く一気に讀んだことだらう。間違つても、獨奏曲に感心して、交響樂はわからぬなど云つて、見識を疑はなくてはならぬと、利らぬ交響樂を、指揮者を信頼して買つたのでなければ幸である。

文化の速度に就て

臺灣に住んでみると、文化をひき上げるなど云ふことは、しかくはやさしいことではないと思ふのである。元來文化などとは、自然發生的なものである。發達の速度は、進化論的の緩急なのだと考へたりする位である。勿論それは理論的に間違つた考へにすぎない筈だが……。しかし考へやうによつてはさうばかりも云へぬやうな氣もする。領土四十一年でこゝまで來た事は、むしろ早い方で、緩慢どころではないかも知れぬ。明治以後日本のなした速度が、餘りに早く加速度的であつた爲に、臺灣のそれがひどく、ろく思はれるのかも知れぬ。しかし、日本語の普及がまだに拘へられ、臺灣鐵道の昔かはらぬ律儀さは、ほめた話で

「文明開化」を稱へ、かつそれを希望したのは、決して一層人士でなければ、まして天才的ある個人ではない。文明開化」が國民各層に完全に浸透し、國民各自の普通の意欲となつて現はれてゐた事實をこそ見おとしてならぬ。文明開化」が一時代の合言葉となつてゐた事實こそ、加速度的の秘密であらう。

臺灣には、さう云つた合言葉がなかつた。成る程「産業開發」は一時の合言葉であつたし、今日、臺灣の驚異的産業の開発の結果として、「文明開化」が、物心両面に効果を現はした程には、十分でなかつた。「産業開發」の合言葉は多分に物的方面に限られ、精神文化には幾分縁の薄い合言葉であつた。

國民學校の義務制も、文化の向上に多大の効果を發揮することには疑のない處だが、しかしそれは今云つた制度の側よりする促進法であり、それだけでは、速度は相變らず進化論的である。問題は、文化意欲を如何にかきたるかであり、國語問題の如きも、かゝる見地から解決すべきであり、徒らに制度による促進法にのみ頼ると、學校を卒業すると、何時の間にか國語を忘れて了ふと云ふ結果を招

きやすい。優れた台言葉が今こそ切實に要求される。

映書に就て

映書はあくまで視覚藝術であることを忘れてはなるまい。ところが近頃の映書は、この本質を忘れて、聴覚藝術に移行しつつあるかにみえる。云ひかへれば、科白の過剰である。科白で事を運ぶのは、安易であるばかりでなく、自らその藝術性を放棄する自殺行為である。映書は面白くなく云つたと云ふ近頃の定評も、或はこの邊に關係がないとも云へまい。機路練のやうにしやべりまくる米映書の如きは決して、映書的ではなかつたのである。映書は、無聲映畫末期に於て、純粹性に於て最高の境地に達し、トーンとなるに及んで邪道にまづしぐらに突き進んだ感じである。もうそろそろフィルムが物をいふ云ふ新奇性を楽しんで、視覚藝術の本道に立返つて、『科白』を處理すべき時であらう。『華かなる幻想』と云ふ映書の封切にあつて失明勇士や、生徒を集めて試験會を開いたといふ事を新聞でみて、誠におどろいたのである。たとへこの映書が失明勇士を取扱つたものとは云へ、かゝることが行はれる

と云ふことは、映書が、今日如何に視覚から離れて——邪道にあるかの證左とはなるであらう。音楽映畫だなど云つても駄目である。映書人の再自覺が喫緊である。今のまゝではフィルムは到底底限にはなれぬ。ツンギに音楽の鑑賞は不可能事である。映書はもとよりそこまで演舞ではあり得ないとしても、その本質を忘却してよい程はない。音楽映書と映畫音楽とはごつちやにさるべきものではない。

【台紙文学】 3 2 108 113 頁

演出雑感

小林 洋

富士時劇に、自作『海賊の墓』を演出するることとなつて、八日間東北水産館に通つた。双劇の劇かりやつてある劇團に、いかに臨んでの監督劇なので、向ふも物手が違ふであらうし、こちらも両語をよく押さえない相手なので、その苦勞は甚大抵のものではなかつた。併し、わたしは彼等の熱意と熱誠が、此の四幕、一時間以上の劇かしく、作品であり演出家である自分の期待以上にやり終したことに驚嘆せずには居られなかつた。練習をはじめて二日に、劇作家演説の八人が来て、わたしの演出ぶりを見た

ときは、これぞ果して観客にのせられるかどうかを危ぶんだといふことであるが、事實わたくしは僅か八日目、これでこれを劇行に促はうといふ大それた氣持は到底持てなかつた。誤つて冤たや、ふを痛打することには、なか／＼容易な業ではない。それも一日にせい／＼四時間だけの練習である。いくら筆ばかり焦つても、實際は思ふ通りにならない。出演者二十餘名といふ大かゝりな劇であるだけに、何事指図も時間の關係で意気がちになつてしまふ。それでもわたしは彼等の傍につききりて、寸暇を惜しんで詳

本を手繰り返し繰返し修正した。わたくしの言ふことは、そのまゝでは通ずる筈がない。唯だ含めやうに言つても、細かいことは結局通解の力とならなければ駄目である。

わたくしは無下に成りつたり、相手を絶望させるやうなことは絶対にしなかつた。それをする必要のないほど、彼等がわたくしの言ふことに忠實であり、その通りをよく守つたからである。通解させてはいけない、通解劇は始めてなのだからと、わたくしは目録力を常に喚び出して、振舞ふと感した。劇のいきをのみこんで呉れれば、彼等はわたくし以上に役々を生かす技術を知つてゐた。納得すれば實に巧みに変換をする。彼等はそれによつて生かす能動だからである。併し、さうは「その」の、彼等の演技をそのまゝ利用することは、同時に又多くの危険性を孕んでゐた。つまり両面劇が眞に要求する動作も、彼等が肩につけ

